

ナイスミディ外来における漢方薬の位置づけ

財団法人神奈川県警友会けいゆう病院 産婦人科 医長

大石^{あきら}曜先生



1997年 獨協医科大学 医学部 卒業
同年 獨協医科大学 産婦人科 臨床研修医
1999年 国立横浜東病院 産婦人科
2001年 獨協医科大学 産婦人科 助手
2003年 山形大学医学部 産婦人科 研究員
2009年 獨協医科大学 臨床講師
2010年 財団法人神奈川県警友会けいゆう病院 産婦人科
2011年 同 医長

財団法人神奈川県警友会けいゆう病院産婦人科では、2012年2月に更年期医療の専門外来である「ナイスミディ外来」が開設された。歴史ある病院において、更年期医療の新たな取り組みが始まったのである。ナイスミディ外来では、患者さんを更年期障害と一括りにして治療するのではなく、個々の患者さんの訴えを十分に聴取し、的確に治療することを主旨としている。今回は同院産婦人科医長であり、ナイスミディ外来の責任者でもある大石曜先生に更年期医療のあり方、さらには更年期医療における漢方薬の位置づけについて伺った。

地域医療連携・高度医療の中核病院として

当院は1934年に「警友病院」として横浜市山下町に設立された、市内でも有数の歴史と伝統を誇る病院です。1996年に現在地に移転し、その際に名称も「けいゆう病院」と改称しました。当院は名称が示すように警察官や消防官の職域病院として設立されましたが、当時から地域の基幹病院としての役割を担っており、現在も地域医療連携・高度医療の中核病院として広く活動しています。

このように歴史と伝統のある当院産婦人科の最大の特徴は、何と言っても分娩数の多さにあります。年間分娩数が約1,300もありますので、当科では周産期母子医療に最も注力しています。また、子宮癌や卵巣癌などの癌患者さんも増加傾向にありますので、癌治療はもちろんのこと、緩和ケアにも注力しています。生殖医療にも取り組みたいところですが、周産期母子医療と癌治療・緩和ケアを最優先に行うと、どうしても体外受精までには手が回っていないのが現状です。



中野眞佐男部長(左)と大石曜先生(右)

ナイスミディ外来設置の背景と現況

私は大学卒業後、ホルモン領域の研究を続けており、日本女性医学学会(旧 日本更年期医学会)の会員でもあります。2008年に学会の認定医制度が開始されましたので、私も認定医の資格を取得しました。このことを中野眞佐男部長にお話ししたところ、「更年期障害の患者さんは診察にかなりの時間をかける必要があるから、ゆっくりと時間をかけて診療できるような外来を立ち上げてはどうか」とお勧めいただき、2012年2月に「ナイスミディ外来」を設置しました。

ナイスミディ外来は、週1回、2時間の枠を設けています。患者さんにじっくりとお話しをしていただき、それをきちんとお聞きするため、一人の患者さんの診察時間を20分としています。

受診希望の患者さんは非常に多くいらっしゃいます。もちろん、全ての患者さんを診察したいのですが、一人の患者さんにかかる時間を確保するために、当面は現在の体制を維持しようと思っています。

また、精神疾患を合併しているような患者さんもいらっしゃいますが、そのような場合は、精神科の先生と相談の上で治療するなど、他診療科との連携も図っています。

患者さんに「物語」を作っていたく

ナイスミディ外来では、患者さんに環境・個人的背景などを話したいだけ話していただき、その上で

患者さんに「物語」を作っていただくというNBM (Narrative-based Medicine) を実践しています。

たとえば、子どもが受験を控え、一方で高齢者の介護もしなければならない、という患者さんがいらっしやいます。患者さんのご主人は、「それは嫁がすべき当たり前のこと」と一蹴されますが、患者さんが望む「物語」は決してそうではなく、ご主人やお子さんにも協力してもらうことで皆が幸福になる、というものです。したがって、それを実現するために、ご主人にどのようにして協力していただくか、お子さんにどのように説明するか、という「物語」を一緒に作り上げるのです。これが「物語」を作るということです。ここで私が「ご主人は会社で仕事をされているから、家庭のことまでお手伝いすることは難しいですよ」と言ってしまうと「物語」はできあがらないままそこで終わってしまいます。そうならないように脈々と話しをつなげて患者さんにとって納得のいく「物語」を作っていただくことが、この外来の趣旨といえます。

ナイスミディ外来における漢方治療

患者さんの訴えを理解した上で薬物治療に進みますが、特に漢方薬を処方する患者さんが非常に多く、全体の約7割にのぼります。その背景には、患者さんの漢方薬に対する安心感があります。たとえば、抗うつ薬、ホルモン補充療法、漢方薬などの治療選択肢を説明すると、大半の患者さんは漢方治療を選びます。また、医師も漢方薬は副作用が少なく比較的安心して処方できますので、漢方薬で治療をする患者さんが多くなるのだと思います。

実際に処方している漢方薬は、婦人科の三大処方である当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸が多く、中でも精神的な症状に効果がある加味逍遙散を第一選択としています。内服前と内服1ヵ月後に、簡略更年期指数 (SMI) と、抑うつ自己評価法 (SRQ-D) を行って、更年期症状の評価と漢方治療の評価を行っております。まだ十分な症例数が集まっていないのですが、加味逍遙散にて寝つきの改善など生活リズムの改善を認めております。これは、加味逍遙散をはじめ、漢方薬には体のリズムを整える作用があるのではないかと考えています。

また冬場を中心に、末梢の冷えがあるような患者さんには、「冬用の漢方」として温経湯などを処方することもあります。西洋薬で冷えを改善することは難しいですが、漢方薬が奏効する症例を多く経験しています。また、比較的疲れやすい、虚弱体質の患者さんへの第一選択は補中益気湯ですが、補中益気湯は飲みにくいとおっしゃる患者さんには半夏厚朴湯をよく処方します。このように、当外来における漢方薬の位置づ



けは非常に大きいと言えます (表)。

表 ナイスミディ外来における主な漢方処方

疾患・症状	処方名	主な投薬目標
更年期障害全般	加味逍遙散	精神症状、不規則な生活リズム
	桂枝茯苓丸	冷えのぼせ、下腹部痛、肩こり
	当帰芍薬散	貧血傾向、冷え症、浮腫傾向
疲れやすい・虚弱体質	補中益気湯	食欲不振、寝汗、食後の眠気
	半夏厚朴湯	のどや胸のつかえ、抑うつ傾向、補中益気湯が飲みづらい
冷え	温経湯	冷えのぼせ、手掌のほてり、口唇の乾燥

漢方薬を処方する際の注意点

漢方薬を処方する際、私は「漢方薬は絶対に効きます」とは言いません。むしろ、「漢方薬は『何となく』効いてきますよ」「漢方薬に過度な期待はしなしてください」と説明しています。そうすることで、僅かでも改善傾向がみられると、患者さんは漢方薬に対し良い印象を持たれますし、服薬継続率が向上します。

また、時には「騙されたと思って飲んでみてください」という一言で大丈夫なこともあります。ただし、このようなお話しができるのは、一人の患者さんに十分な時間をかけて診察しているからこそではないかと思っています。

これからのナイスミディ外来と更年期医療について

ナイスミディ外来は、患者さん個々の診察に多くの時間をかけることを基本にしています。当面は現在の体制を継続する予定ですが、非常にニーズが高い外来ですので、認定医資格を取得した医師が増えれば、拡充していきたいと考えています。

現在は、全員が更年期障害の患者さんですが、私自身はホルモン領域を専門としていますので、今後は月経不順等も含め、さらに診療の幅を広げたいと思っています。

更年期医療はこれからの産婦人科医療においてとても重要です。従来の「日本更年期医学会」も「日本女性医学会」と改称し、更年期医療だけでなく、さらに幅広く女性の医療を考えようとしています。若い先生には是非とも更年期医療に興味を持っていただき、積極的に診療に携わっていただくことを望みます。